

ワールドユースデーでの交流

河合理菜

今回の渡航が私にとって初めてのヨーロッパ、ポルトガル、そしてワールドユースデー(WYD)でした。現地でのプログラム中は、慣れない環境で戸惑いや不便さを感じたこともありましたが、毎日が充実しており、とても楽しい日々を過ごしていました。日本に帰ってきて、自分の行動を振り返り、私は自分がWYDに参加した理由を思い出しました。それは「同じカトリックという信仰を持った青年たちと交流したい」というものでした。私はこのWYD中、周りにいる人々が同じカトリック信者だと感じる場面がいくつもあり、私の目的はしっかり達成されていたことに気が付きました。

一つは、同じ日本巡礼団の青年との関わりの中で感じました。青年たちと会話をしていると、自然と「自分の教会に子供とか青年どれくらいいる？」や「今教会でこんなことをやっているんだけど…」という話をしていました。普段の何気ない会話に、このような話題が出ていることに自分でも驚きました。私は今まで、ほとんど京都教区の青年としか関わりがなく、同じ教区ならばどこからか情報が入ってくるので、わざわざそのような話をしたことがなかったからです。他教区の青年と自分の教会について話をするのはとても新鮮でした。日曜学校を担当している人がいたり、小学生キャンプの総括をしている人がいたり、また教会の名前になっている聖人がどんな人なのかなど、年齢が近く同じカトリック信者だからこそできる話題で、嬉しさを感じました。そして、その「同じ信仰を持っているんだ」という思いが、異国の地にて不安定なスケジュールの中で生活するという状況でも、日本人同士の結束力を高めてくれました。

もう一つは外国人巡礼者と関わり、感じました。本大会のあったリスボンに到着すると、それまでとは比にならないくらいに、本当に人の数が多く、色々な国からの巡礼者がいました。同じWYDの参加者カードを身に付けている人とすれ違くと「Ola!」と声を掛け合い、時にはお互いの国のお土産を物々交換しました。外国人巡礼団には、楽器を鳴らし歌を歌いながら道を歩いている人も多く、その音が聞こえてくると歩き疲れていても気分が高鳴りました。特にヨーロッパの青年はいつでもどこでも歌っていて、とても賑やかだという印象を受けましたが、ミサの最中は静かでした。当たり前なことだと思われるかもしれませんが、日本との文化の違いに直面していた私にとっては、同じ時に同じ気持ちで同じ沈黙を過ごしたのは、「同じ信仰」を感じた瞬間でした。

私は今回のWYDで、この文章には書ききれないほどの様々な経験をさせていただきました。ここで体験したことを自分の糧とし、また周りの人にも伝えて、これからの人生をより実りあるものにしたいと思います。最後に、共に2週間を過ごしてくれた公式日本巡礼団の皆様、WYDに関わってくださった全ての皆様、私たちのためにお祈りしてくださった皆様、本当にありがとうございました。